

保育者養成課程における音楽的な創造力育成のための一考察 —サウンドエデュケーションを手掛かりに—

A Study on Developing Musical Creativity in an Early Childhood Education Course: Using Sound Education as Clues during Demonstrations

(2021年3月31日受理)

廣 畑 まゆ美

Mayumi Hirohata

Key words : 音楽, サウンドエデュケーション, 創造性, 保育者養成

要 旨

日常的な保育の場面で、子どもたちが様々な音に気づいて楽しんでいる様子はよく見受けられる。しかし、そのような子どもの気づきは保育者に屢々見逃されるか、気付かれても十分に受容・応答されていないのではないだろうか。保育者が幼児の柔軟で自由な表現を理解するためには、保育者自身が、創造性とほどのようなとき生じるのかを体感することが一助になるのではないかと考える。本研究では、保育者養成課程の学生に対して、音楽的な創造力を磨くことを目的とする「サウンドエデュケーション」の活動に取り組んでもらい、学生の創造力の変容を感想レポート・実演の記録から調査した。その結果、学生は、子どもの視点を踏まえて既存の活動から新規性を伴う創造的な実践を行うに至った。

サウンドエデュケーションの活動は、学生の創造力を高めることに影響し、養成校の学修において効果的な実践となることが示唆された。

1. 研究の動機

子どもが音を聴いて真似をしたり、少し時間がたって聴いた音を再現するような場面は保育の現場においてよく見られる光景である。そのような子どもの様子はある種の表現活動とも考えられるが、それに気がつくかどうかは保育者の感性によるところが大きいのではないだろうか。駒(2013)は、このような子どもの表現は、保育者に気付かれることなく消え去ってしまったり、運よく保育者に気付かれても、子どもの活動をどのように音楽活動に発展させたらいいか、保育者自身がその手立てを持っていなかったりするのではないかと指摘している。

著者自身、認定こども園で補助員として勤務していた時期があったが、おそらく多くの表現の芽を見逃してしまっていたのではないかと考える。ある日、保育室内全

体に響き渡る声でひとりの子どもが叫ぶと、それにつられて別の子どもが同じように叫び始めた。大きい音やその響きに面白さを感じていたのだろう。当該の子どもは楽しんでいたが、別の遊びをしていた子どもたちから「うるさい」という声があがりはじめ、たしなめられるような形で声をあげるのをやめた。発展的な学びに転換させられる即興的な声掛けや活動の展開ができなかった経験として記憶している。例えばその時、声を出している子どもたちに対して、周りの友達の表情を見ることを促せば、単にたしなめられることによって収束するのではなく「自分と他者の音の感じ方の違い」に気付くことができるきっかけになったかもしれない。保育者が学びにつながる萌芽をその場で即興的に見出し、受容・応答することは準備して対応できることではないため極めて難しさを伴うものだと痛感した。どうすれば保育者は子どもの活動の中から気づき、援助できるのだろうかと考えた。

2019年度全面施行の幼稚園教育要領の領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」ということが掲げられている⁽²⁾。子ども自身で実際に取り組む過程で活動を発展させていくことも十分に考えられるが、心身とも成長の途上にある子どもは、保育者がいかに受容・応答するかによって、その活動が大きく変化する。幼稚園教育要領解説において、「幼児の発達を促すにあたり、幼児の興味や安心に応じて必要な刺激が得られるような応答性のある環境が必要」⁽³⁾であるとされ、子どもにとっての環境とは自然環境に限らず、人も含めた幼児を取り巻く環境の全てを指している。子どもの未分化・未発達・成長の途上である活動を支えるには、保育者自身が子どもの活動に対して受容的・応答的であることが重要であることは様々な先行研究も述べており（今川，2008．中川・片山，2015 et al.），保育者の実践的な場面における力として現場で求められていることが理解できる。

しかし実際の現場でその指導内容や指導技術に課題意識を持っている保育者は多く、特にその点について養成校のうちにもっと学んでおけばよかったと強く感じるようである⁽⁴⁾。ただ、現役保育者が養成校時代に、将来の実践につながることを全く学んでいなかったということはないだろう。実践してみる段になって、なぜそのような学習が必要だったのかという意図に気が付き、学生時代における学修の仕方を後悔することになるのではないだろうか。ゆえに、通り一遍を保育者養成校の学生に指導するだけでなく、将来指導する場面を想定しながら、そもそも子どもは体験しながらどのようなことを学び取っているのか、という視点を持ち、主体的に学修を深めることが必要であると考え。文部科学省の調査によると、保育者養成課程は、保育者としての成長過程の始まりの段階に位置すると考えられている⁽⁵⁾。この期間に保育者としての基礎的な学修に加え、実践的な学びを得ていくことも保育者の成長として欠かせないものであることが示唆されている。

曾田（2016）は、成人は一般に、楽譜に基づいて演奏を行う習慣があるため、柔軟性を持つ幼児の表現を保育者が支援するためには、保育者養成の段階で経験しておくことが必要となると述べている⁽⁶⁾。また、保育者養

成課程の学生が子どもの活動を経験することについて、「幼児が探し出した音の質感を、的確に認め共感する力の育成につながるであろう。言い換えればこれは、幼児とともに世界を鳴らすという試みでもある。」⁽⁷⁾と述べている。知っていることと指導することは完全に一致するものではなくとも、保育者がその活動の趣を感じていない中で子どもの気持ちに共感することは難しい。実際に体験することを通して、保育者自身が音や音楽、演奏することにおける音楽的な創造性を高めることの重要性を示唆している。

廣畑（2021）は保育者養成校の学生に対して、サウンドエデュケーションとわらべうたを題材に子どもの活動を追体験する調査・実践を行い、その追体験が学生の音楽的な実践力育成にどのように影響するかを調査している。ただ、ここで育成しようとしている「実践力」の幅が広く具体性に欠いている。本研究では、廣畑（ibid.）の実践でさらに分析が必要と思われる保育者養成課程学生自身の音楽的な創造性に焦点を当て、サウンドエデュケーションの活動に取り組むことで、学生の創造性がどのように変容するかを感想レポートや学生のパフォーマンスの記録を使って調査する。

2. サウンドエデュケーションについて

サウンド・エデュケーションはカナダの作曲家、マリー・シェーファー（1933年～）によって提唱された、音そのものを聴く創造的な音楽活動である。1980年代に翻訳書籍が出版されたところから話題となり、昨今、日本の音楽教育でもシェーファーの発想を起点とするものが数多く取り扱われている。島崎（2010）は日本の音楽教育における創造的音楽学習の歴史の変遷において、シェーファーが「音楽の真の核心は創造にあるとして、具体的な音の課題を提示しながら、聴くこと、分析すること、つくることの重要性を主張した」ことが、創造的な音楽学習が注目される契機になったと述べている⁽⁸⁾。国内ではシェーファーの著書を鳥越けい子や若尾裕、今田匡彦が翻訳したり、山本文茂・坪能由紀子らが創造的音楽学習を音楽教育の中に浸透させたことにより、その後の発展に絶大な影響をもたらした。2019年度全面施行の幼稚園教育要領解説における領域表現「3. 内容の取

扱い(1)」では、感性を養う際「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」⁽⁹⁾と言及されている。これはこの改訂で新たに加わった文言である。サウンドエデュケーションの概念が年月を経てようやく教育現場に浸透したように思われる。しかしこれは全く新しく加わった概念ではなく、昭和22年刊行の「保育要領」においてすでに同様の記載がある⁽¹⁰⁾。かつてから日本人はこのような自然音に意味を見出して聴取する傾向があることは「保育要領」がすでに示唆しており、幼児教育の現場でその感性を磨くことに重きが置かれた時期があったことが理解できる。

金子ら(2019)の研究によると、2019年までにサウンドエデュケーションの実践報告事例は55件にのぼり、中でも保育者養成課程の学生に向けた実践は多く報告されている。いずれの実践でも、対象者の音を聴く力を育み、音と環境との関わりに対する意識を高め、感受性、創造性、表現力の育成を目指していることが確認されている。しかし活動形態が様々であるがゆえ、対象者の表現力や観察力が豊かであればあるほど、表現内容は自由度が増し、分析する項目が絞りにくくなるという問題点があることも指摘している⁽¹¹⁾。サウンドエデュケーションの学びにおいて「創造性」が重視されているものの、明確な学習方法がないため学びを体系化できず、教育の場で浸透させづらかったことがうかがえる。活動を賞賛する声が高まる一方で、否定的な見解が示されることもあった。特に、このような活動の多くの帰着点が「効果音づくり」になってしまう点において顕著であった⁽¹²⁾。しかし、日本人は古来、日本の伝統音楽に自然の音を反映してきた独特の音楽的な感性を持っているとされ⁽¹³⁾、効果音レベルの取り組みが問題なのではなく、指導に問題があるのではないかと、島崎(2010)は疑問を呈している。音楽教師に音楽構成に対する認識と音楽的センスがあれば、そこを起点として、活動はいかようにでも発展させることができる⁽¹⁴⁾。逆に、音楽教師にその力量がなければ、活動の発展は見込めないとはいえる。高い技術が活動を音楽的にするというのではなく、教師がどのような点に活動の意義を見出し、子どもの興味関心を導いていくかという部分が重要で、指導する側の音楽的な創造性がサウンドエデュケーションの扱われ方の変

遷からも問われているのではないかとということが考えられる。

前述の通り、「音楽の真の核心は創造にある」としてサウンドエデュケーションの活動が提唱されていることを踏まえ、この活動に取り組むことで子どもの創造性に気づくことができるような学習方法を検討する。チクセントミハイ(2016)は、創造性を発揮するためのステップは「好奇心と興味を育むこと、つまり、他の目的ではなく、純粹にそのもののために注意を振り分けることである。」⁽¹⁵⁾と述べている。学生自身がシェーファアの提唱したサウンドエデュケーションの活動に取り組むことによって、活動に対して何を思い、どのように思考を巡らせるのか、その創造性の発露を見出したい。なお、音楽的な創造性の言葉の定義について、本研究では「音楽的な新規性が自身の活動に表出すること」として取り扱うこととする。

3. 音課題の実践

3-1. 音の日記について

マリー・シェーファアの著書『サウンド・エデュケーション』や今田匡彦との共著『音探しの本 リトル・サウンド・エデュケーション』では、音に関する課題が設けられており、中でも「音の日記」(下記参照)は音を省察的に聞く活動として取り上げられることが多い。聞いた音を記録し文字化することによって、音を意識的に聞くようになることが目指されている。

『音の日記』をつけてみよう。なにかめずらしい音を毎日見つけて、その感想を日記に書いてみよう。もちろん日記はみんなにはないしょだけど、だんだんやってくるにつれて、クラスでみんなに話したくなってくるだろう⁽¹⁶⁾。

先行研究では、岡本・吉永(2013)、東海林(2014)、吉永(2016)の取り組みがあげられる。岡本・吉永(2013)は、保育者・教員養成校の学生に対して「聴くこと」への意識を高めるための試みのひとつとして音日記を用いている。学生が「意識的にとらえやすい音」や「意識的になれない音」はどのようなものかという「音の意識へ

の傾向」を知ること、気づきや意識の変化を明らかにすることを目的とし、「音日記」を書くことにより、生活の中にある身近な音に意識を向ける素地づくりに役立つことが伺えたことを明らかにしている。東海林（2014）は、小学生を対象にした実践であるが「音の日記」をつけることによって自身が無意識に聞いていた音から、音楽の概念を拡大させるような創造力の育成につながったことを報告している。吉永（2016）は保育者養成校の学生を対象に実践し、学生の気づく音の数が日記に取り組み時間の経過とともに増加し、その考察が深まっていることを示唆している。廣畑（2021）はこのような先行研究に倣いながら、「音の日記」を保育者養成課程の学生に実施してみたところ、その活動単体で深い考察ができて、その後、別の活動において知識を応用できそうな場面が表れても応用できないことを述べた。学生の活動がそれぞれの体験として成り立っており、せっかく知識を得ても「音楽的な創造」につながるには、さらに継続することや意識的な知覚が必要であることを示唆している。この時の実践から得られた学生の記述内容と、その後の授業で実践した実技テストの動画記録を照らし合わせながら分析する。パフォーマンスはテスト形式で行われていて、筆者とは別の教員による採点が行われているので、その採点内容等も参考にし、サウンドエデュケーションの活動が学生の創造性とどのように関係しているかを調査する。

3-2. 実践内容

実践に関する詳細は以下の通りである。

〈対象と期間〉

2020年度「子どもと表現」の当日受講者90名（2年生、教育・保育実習等経験なし）を対象に、2019年度全面施行の幼稚園教育要領と関連させながら、わらべうたとサウンドエデュケーションについて体験する授業を1コマ行ったのち、1週間「音の日記」を宿題として取り組んでもらった。1週間後、保育の現場を想定した実演テスト（わらべうたの歌唱）を行い、授業前から実演テストまでに自身の聴取活動や表現活動にどのような影響があったかを調査する。

〈調査方法〉

ワークシート（巻末資料参照）を用意し、聴こえた音

の名称やその感想を記録する。活動のガイダンスとして、その日一番大きかった音、きれいだった音など、あらかじめいくつか観点を設け、日記の記載例を示した。また、取り組みを振り返るため（1）心地よかった音とその理由（2）不快だった音とその理由（3）考えたことや感想の自由記述欄を裏面に設けた。その後の実技テストにおける学生の表現を映像記録で確認し、レポート・映像・実技の得点をもとに傾向を分析した。

4. 実践の結果と考察

4-1. レポートから得られた結果

「音の日記」で得られた学生の感想レポートの内容から（1）日ごろ気が付かなかった自然の音や環境音への気づき（2）音楽の音への気づき（3）子どもの感覚に対する気づき（4）音を記憶することの難しさに対する気づきが見られることが傾向として示唆された。

（1）日ごろ気が付かなかった自然の音や環境音への気づき

学生のほとんどが「こんなに音にあふれていることに気が付かなかった」という記載を残し、時間の経過とともに徐々に書き記す内容が増えていた。気付いたことでは、自然や環境に関する音の記載が多く、それに対して癒されるような気持ちになるという感想が目立った。学生の中で自身の聴取傾向やどのような音が「きれい」なのか価値観を形成する所以を考察しようとする感想が目立った。また様々な変化を感じる感覚器としての「聴覚」の役割の重要性に気付いた学生もおり、深い考察に至っている。以下、学生の感想で興味深い内容のものを取り上げる。

- ・季節の移り変わりは視覚や気温で感じるのが一般的だと思っていましたが、音でも感じられるのだと実感しました。
- ・こんなにも自分が音を出していることに気が付かなかった。また、音1つで自分の心情が変わることも分かった。

歌を歌うことはまさに自分自身から音が出ている状態である。後者の感想のように、自分の音に対して省察的になるということは、音楽表現の工夫にもつながる思考であり、この学生の実技の成果に期待ができる。

(2) 音楽の音への気づき

自分が心地よいと感じる音に関する質問を表化してみたところ、自然の音が多数を占めるものの、次いで「アーティストの音楽」であったり「楽器の音」（ピアノ、サクソフーン、オルゴールなど）、聞き慣れた音楽の音であった。（表1参照）改めて様々な音を聴き、初めは日ごろ意識していなかった自然の音に新鮮さを感じていても、アーティストの声質、リズム感、ハーモニー、楽器そのものの音色、音楽の構造などを良いと感じ、音楽としてのまとまりを求めている可能性が見受けられた。

【表1】心地よい音（自由記述、複数回答可）

| | (人) |
|--------------|-----|
| 自然の音（風，雨，水） | 23 |
| 動物や昆虫の音 | 21 |
| 好きなアーティストの音楽 | 15 |
| モノから鳴る音 | 12 |
| 楽器の音 | 12 |
| 人間の出す音 | 9 |
| その他 | 9 |

(3) 子どもの感覚に対する気づき

大半の学生が、自分自身の体験に焦点を当て、その感想や考察を記載していたが、中には自分の体験をもとに「子どもはどう感じているのか」と問い直している感想が見受けられた。特徴的な回答は以下の通りである。

- ・自分たちはすでにいろいろな音を知っているが、子どもは初めて体験する音が多いと思うので様々な気づきを得て日々過ごしているのではないかと思った。
- ・子どもたちは大人よりもっと多くの音に敏感に反応しているのかなと考えた。

体験をもとに、子どもの視点を意識することによって、どのようなときに子どもの創造性の発露が見られるか注意深くなることができるのではないかと考える。また、もし自分が保育者として実践したならば、という想定を持って書かれた以下のような感想もあった。

- ・子どもたちは大人よりも音に興味を持つと思うから、生活の中から音を汲み取って子どもたちが耳を傾けられる環境を作りたいと思った。

シェーファーの著書において「だんだんやってくるにつれて、クラスでみんなに話したくなってくるだろ

う。」⁽¹⁷⁾と述べられている。聴こえた音に対して家族間で話し合った際に承認されたり、新しい意見をもらうことなどで、活動の楽しさややりがいを見出したという感想もあった。活動において他者からの意見やアイデア、何気ない言葉の影響が活動の動機につながるということが示唆されている。保育者の存在は子どもを取り巻く人的な環境であり、保育者として子どもの創造性を発露させられる環境を多面的に考える重要性に気が付いたものと考えられる。

(4) 音を記憶することの難しさに対する気づき

目立った回答は「音を覚えておくことが難しい」ということであった。

- ・（その日）一番はじめに聴いた音などは普段は全く気にしていないので思い出すのが難しい。
- ・変わった音をおぼえているということがなかなかできなかった。

というように、その時感じた思いを言葉などで明確に残せないことを体感したようである。しかし難しさを指摘する一方で、記憶をたどる過程から、その時感じた気持ちを同時に思い出す楽しさを感じた、という記述や、音とともに感じた気持ちの所以を知るに至ったというという記述があり、ネガティブに捉えているわけではないことがうかがえた。

4-2. 実践との関わりの結果

音の日記から1週間後、保育現場を想定したわたぼうしの歌唱実技テストを行った。筆者とは別の教員1名が採点を行った。採点は100点満点で行われており、学生自身で設定した場面想定を表現できているかどうか、保育的な観点と音楽的な観点が基準となる。筆者はのちほど、動画でその様子を確認した。

90点以上を記録している学生のパフォーマンスの様子を見ると、自分で設定した対象年齢をもとに、(1) 子どもの姿を想定した声掛けや配慮が見られる(2) 姿勢を落とす、動きを大きくするなどの身体表現への工夫が見られる(3) 対象者や環境に合わせて声(音)の大きさの調節を行っていることが明確であった。

(1) 子どもの姿を想定した声掛けや配慮が見られる

対象年齢の言葉の発達や理解度を考慮して、遊びのルールを説明したり、手遊びを歌につけて興味関心を引

く方法を工夫していた。もちろんその場に子どもがいるわけではないが「わかりましたか?」「先生が見えますか?」というような、子どもの視点を確認する声掛けも見られた。これは具体的にこうしたほうがよい、という指示を教員が行ったわけではなく、学生が実演を行う過程で主体的に取り組んで表現したことである。

(2) 姿勢を落とす、動きを大きくするなどの身体表現への工夫が見られる

子どもの体の大きさに合わせて、座って活動に取り組んだり、姿勢を低くし、表現の大きさを考えるなどの工夫も見られた。また、対象年齢に合わせて、既存の曲でよく知られている手遊びや遊戯の内容を変化させているようなケースも見受けられた。

(3) 対象者や環境に合わせて声(音)の大きさ調節を行っている

何人程度の子どもの輪の中に入っているのかを具体的に想定し、複数名を想定した活動の場合は指示が伝わるように明瞭に声を出していた。また、乳児を想定した学生は1対1であることを踏まえ、顔をよく見てささやくように歌う様子が見られた。

4-3. 考察

これら結果と歌唱実技90点以上を取得した学生の「音の日記」で書いた感想を照らしあわせて見てみると、活動をポジティブに捉え、日ごろ気が付かなかった自然の音や環境音への気づきを得ており、自分なりの考察を明確に行っている。また、音楽の音への気づきが多く、ほとんどの学生が気に入った音楽を聴く習慣であったり、楽器に親しんでいる傾向があった。「ピアノの音」「ボーカルの声」「このフレーズ」と音の詳細を示しており、日ごろの習慣を知覚する活動となったことが考えられる。「いろいろ音を聴いて、アーティストの音が良い」と帰着することで、音楽として美しく豊かに表現することの重要性を体感しているのではないかと考えられる。

「自分が出す音に気が付いた」と感想に記載していた学生は、多角的に音楽表現を捉えたかと思っただけで、実技テスト得点は68点と芳しくなかった。自分の音に気が付けるということは必ずと歌声などにも省察的になり、工夫が見られるようになるのではないかと考えられた。しかし映像記録で学生のパフォーマンスを確認してみる

と、表情が乏しく、声のトーンが一定であり、身体表現の工夫が少なかった。これには2通り考えられる。そもそも多くの研究が示唆するように、サウンドエデュケーションは技能に直結するものではない。表現したい思いはあったが、表現するための技能に課題があった可能性が考えられる。もうひとつの考えとしては「音の日記」で得た気づきとパフォーマンスが関係していることを知覚できていなかったことが考えられる。得点こそ伸びなかったものの、子どもを想定した声かけを行うなどの工夫は見られているので、それぞれの活動を意識的に結びつける機会が必要だった可能性が高い。

サウンドエデュケーションの「音の日記」の活動に取り組むことによって、「子どもにはどのように聞こえるのか」「自分が保育者であればどう表現するか」と、工夫して取り組み表現しようとする思いと創造性の発露を垣間見ることができたのではないだろうか。単純に自分が歌うのではなく、子どもを意識してパフォーマンスを工夫することは、そうすれば子どもたちの興味関心を惹くかもしれないと考えた結果ではないだろうか。声のボリュームを調整したり、視線や表情を検討することも音に対して周りの状況を想定しながら省察的に取り組んだゆえの表現であったように思う。その他の工夫としては、対象年齢に合わせてアレンジしたり、授業の中で取り扱っていない曲を自分で調べて挑戦するケースも見受けられた。こうした方が効果的だと思う理由が、自分たちの体験に裏付けられ、そこから工夫して引き出してきたものと考えられる。

しかし、気づきを得て創造性を発露させていても、それが「音楽的かどうか」という点においてはまだ疑問が残る。パフォーマンスとしての完成度は高いが、よく音を聴くと音程が不安定だったり、テンポが安定しなかったり、抑揚がほとんどついていない場合も見受けられた。基礎のゆらぎがある中で、応用的な積み上げを行っても自分が思索していることを十分に表現できる力量を持ち合わせていないかもしれない。興味深い気づきのあった学生がいたが、技術的な面と結びつけることができず結果が残せなかった例もあった。サウンドエデュケーションの活動が音楽技術を直接的に向上させる活動でないことはシェーファーも言及している⁽¹⁸⁾。ゆえに新たな活動と音楽の技能的な学びとの関わりを意識した学習

内容を行うことで、より深い学びへと発展させることが、取り組むうえでの課題となるだろう。

5. まとめ 今後の展望

サウンドエデュケーションの活動は、特別な技術が前提条件にはならないので、比較的誰でも容易に取り組むことができる。先行研究が示している通り、「音の日記」に取り組むことによって、生活の中に様々な音が存在していることに改めて気づくことを学生に促した。大半の学生が「こんなにも音に囲まれていたのか」という驚きを得て、いかに日ごろ聴覚情報に対して無意識な部分が大きいかということを再確認する結果となった。こうして音に対して省察的になった結果、「音楽の音」に対して心地よいと思う認識があることに気が付いたことは音楽を学ぶ意義の理解にもつながったのではないだろうか。気に入った音色、声色、リズムやメロディ、ハーモニーなどが「調和」することにより美しいとか、心地よいと感じるに至ったことが興味深い。チクセントミハイ(2016)は何かを楽しみつづけるためには、複雑さを増大させなければならない⁽¹⁹⁾と述べている。初歩的な活動に慣れれば、次の活動に対する興味関心が沸き上がる。サウンドエデュケーションの活動は技術の向上に直結するものではないが、技術を研鑽する際にも役立つ省察的な考え方をトレーニングできる。こうして自らの体験に基づく問題意識を基盤として、他の活動と関連づけていくことで、思考力や判断力、音楽的な知識・技能が深まっていくことが考えられる。

また音楽の活動は形に残らないため、プロセスをたどることが難しい。「音の日記」で1週間記録を行うことで、そのプロセスが見逃されがちなことであるということに気が付いたことも意義がある。音を感じたときの気持ちはこうだったとか、その時の気持ちによって音の聴こえ方が違っていたなどと、自分自身のとらえ方に関して形が残るもので省察できた点においても効果があったと考えられる。今回取り組んだ学生の多くは音楽初心者であり、まだ実習の経験もなく子どもの姿を明確に想定できるわけではない。しかしながら、教員が言及していない中で、子どもの姿を想定した身体表現や声掛け、体勢の作り方や声の大きさに対する配慮を新しく考えてパ

フォーマンスの中に取り込むなどの創造性を表出させた。このような学生の姿から、サウンドエデュケーションを取り入れた活動は、学生の音楽的な創造力育成の一助となることが示唆されたのではないかと考える。

吉永(2016)は、子どもたちの感性認識の道筋が生きて生きと構築されるそのプロセスに保育者は参画しなくてはならない⁽²⁰⁾と述べている。今後、学生が子どもと実際に関わる場面でどのようにその創造性を生かした保育を考えることができるか、さらなる実験・検証を続けていきたいと考える。

【注】

- (1) 駒 久美子(2013)『幼児の集団的・創造的音楽活動に関する研究—応答性に着目した即興の展開—』ふくろう出版, p. 3
- (2) 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』フレール館, p. 223
- (3) (2)と同じ, p. 15
- (4) 保育教諭養成課程研究会 平成27年度文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究 幼稚園教員養成課程カリキュラムと現職研修とのギャップの検証に関する研究—幼稚園教員養成校学生との比較—」pp. 34-36 (http://youseikatei.com/pdf/20160602_4.pdf)
- (5) 文部科学省「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/19/1385791_5.pdf)
- (6) 曾田裕司(2016)「保育の「表現」領域における幼児の「変化する音楽表現」への着目」『尚綱大学研究紀要 A. 人文・社会科学編』48, p. 126
- (7) (6)と同じ, p. 131
- (8) 島崎篤子(2010)「日本の音楽教育における創造的音楽学習の導入とその展開」『教育学部紀要』44, p. 80
- (9) (2)と同じ, p. 244
- (10) 「保育要領」六. 幼児の保育内容—楽しい幼児の経験—2リズムにおいて「(略)落葉・雨・雪等の自然現象等すべてリズム運動をしているものに

接すると、そのままリズム運動をして遊ぶのである。幼児が種々の経験をしたあと適当な音楽を伴奏してやるとリズム遊びはもっと面白く、楽しくなる。子どもの心にある映像がリズム的に表現されることにより、感情は強く新鮮に豊かになってくるのである。」という記述が存在する。

- (11) 金子珠世・池田孝博・鷺野彰子 (2019) 「サウンド・エデュケーションに関する研究の動向と課題」『福岡県立大学人間社会学部紀要』27(2), p. 12
- (12) (8) と同じ, p. 85
- (13) (8) と同じ, p. 85
- (14) (8) と同じ, p. 85
- (15) チクセントミハイ, M. (2016) 『クリエイティヴィティーフロー体験と創造性の心理学』(浅川希洋志監訳, 須藤祐二, 石村郁夫訳) 世界思想社, p. 389
- (16) シェーファー=R. マリー・今田匡彦 (2009) 『音探しの本 リトル・サウンド・エデュケーション』(増補版) 春秋社, p. 24
- (17) (16) と同じ, p. 24
- (18) シェーファー=R. マリー (2001) 『サウンド・エデュケーション』(鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦訳) 第5刷, 春秋社
- (19) (15) と同じ, p. 394
- (20) 吉永早苗 (2016) 『子どもの音感受の世界一心の耳を育む音感教育による保育内容「表現」の探究一』 萌文書林, p. 253

【参考文献一覧】

- ・岡本拓子・吉永早苗 (2013) 「「聴く」ことから始まる音環境への関心:保育者・教員養成校における「音日記」の実践 (2. 幼児教育者養成における教育実践, VI 教員養成と教師教育)」『学校音楽教育研究』17, 289-290
- ・小川容子・今川恭子 (2008) 『音楽する子どもをつかまえたいー実験研究者とフィールドワーカーの対話ー』 ふうろう出版
- ・駒 久美子 (2013) 『幼児の集団的・創造的音楽活動に関する研究ー応答性に着目した即興の展開ー』 ふうろう出版

- ・シェーファー=R. マリー (2001) 『サウンド・エデュケーション』(鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦訳) 第5刷, 春秋社
- ・シェーファー=R. マリー・今田匡彦 (2009) 『音探しの本 リトル・サウンド・エデュケーション』(増補版), 春秋社
- ・東海林恵里子 (2011) 「音の聴取・表現と造形表現の相関関係に関する研究ー「音の日記」及び「音のノート」の実践を通して」『音楽教育実践ジャーナル』9(1), 54-65
- ・島崎篤子 (2010) 「日本の音楽教育における創造的音楽学習の導入とその展開」『教育学部紀要』44, 77-91
- ・島崎篤子 (2009) 「新しい音楽教育をめざして」『教育研究所紀要』18, 33-38
- ・廣畑まゆ美 (2021) 『保育者養成課程における音楽的な実践力育成に関する研究ーわらべうたとサウンドエデュケーションを手掛かりにー』 兵庫教育大学大学院修士論文
- ・チクセントミハイ, M. (2016) 『クリエイティヴィティーフロー体験と創造性の心理学』(浅川希洋志監訳, 須藤祐二, 石村郁夫訳) 世界思想社
- ・坪能由紀子 (1995) 『音楽づくりのアイデア』 音楽之友社
- ・中川華那・片山美香 (2015) 「音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究ー人とかかわる力を育むためにー」『岡山大学教師教育開発センター紀要』5, 73-82
- ・文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

参考資料「音の日記」ワークシート

【表】

『音の日記』

学籍番号 () / 氏名 ()

毎日めずらしい音を見つけて、何の音かを書き留め、その感想を日記に書いてみましょう。

以下4つは定点観測として、毎日記録してみてください。

- ・朝外に出て、最初に聞いた音は？ (○)
- ・ゆうべ寝る前に、最後に聞いた音は？ (●)
- ・今日聞いた中で、いちばん大きかった音は？ (大)
- ・今日聞いた中で、いちばんきれいだった音は？ (B)

| 日付 | 見つけた音とその感想 |
|----------|--|
| 例) 10/1 | 例) ・犬の鳴き声 (大) ・好きなグループの曲のギターソロパート (●・B) ・自転車のベルの音 (○) ・雨の音 ・風の音 ・牛乳を注ぐ音 ⇒ 気にしてみるといろいろな音が聞こえてくるような気がしてきた。 等 |
| 10/1 (木) | |
| 10/2 (金) | |
| 10/3 (土) | |
| 10/4 (日) | |
| 10/5 (月) | |
| 10/6 (火) | |
| 10/7 (水) | |

【裏】

【1週間のふりかえり】

・いろいろな音を感じて、あなたにとって、どんな音が心地よかったですか。

・その理由は？

・逆に、不快だと感じた音はどんな音でしたか。

・その理由は？

・音の日記をつけることで感じたこと・考えたことを自由に書いてください。

